

日時：平成 18 年 1 月 13 日
講師：竹花 豊氏（警察庁 生活安全局長）
演題：新年雑感

1. はじめに

子供のおかれた危機的な状況と、その状況に大人社会がどう対応してきたのか、ということについてお話ししたい。私が経験した子供に関わる問題は、非行防止対策が中心である。その問題が提起している様々な事をしっかりと受け止める事が私たちにとって、すごく大事な問題だと確信している。また一方では東京都の副知事時代には非行防止対策が治安上の重要な課題と思い、取り組んだが、その過程で子供をめぐる問題には非行以外にも大変大きな問題がある事に気づいた。

非行防止対策や子供を立派に育てていくには、大人社会として、すべき事があると思っているが、その中で、自ら取り組んだ事や現在も取り組んでいる課題のいくつかを少し紹介したいと思う。

「子供を育てるという視点」について、結論から言うと、「現在生じている子供達をめぐる問題をリアルにとらえて、子供達に『こう育てほしい』という大人の本気を伝えながら、問題を具体的に解決する事が大切である。そして現在、子供達のおかれている状況は、社会の足元を溶解しかねないような深刻な状況である。その状況下で多くの子供達は自分がどんな大人になればよいのか、どんな大人になることが期待されているのか、どんな大人を目標としていけばいいのか、などよくわからないまま、それを教えられずに、未熟なまま育っている状況にあるのではないか。」という事である。私たちは、そのような大小さまざまな問題について、課題として設定して、みんなの力で解決していくことが、大切だということをお願いしたい。

2. 広島県警時代の取り組みについて

私が広島にいた、平成 13 年ごろ、広島では毎週 3~4 回、市内の目抜き通りを晩の 11 時ごろから朝の 3 時、4 時ごろまで、高校生を中心とした 18 歳未満の子供達が数十台のバイクで走り回っていた。土曜日には特攻服を着て 100 名位が市内の中心地にある公園に集まり、時には暴力団も現れ、付近の住民は、皆、眠れない状態が続いていた。また、その異様な状況が、広島のだ真ん中で行われていたため、まわりの旅館やお好み焼き屋の客は減り、非常に迷惑な状態が何年か続いていた。

暴走族の検挙数では全国最多であったが、社会としてその様な状況を結果として認め、放置している状態であった。暴走族や暴走族を放置している状況を見ている子供達の中で、「こんな事をしても、たいして咎められず、そこそこ認められている。そんなに悪いことではないのか。」と思う子供達がいってもおかしくない。放置していることについてはみんなが大きな問題だと思っていたが解決できなかった。社会の人々は「警察なんとかしろ」と思い、警察自身も一生懸命逮捕はするが、解決するまではできないでいた。

しかし、この問題を解決しなかったら、広島社会や広島の子供達は育たないと考え、暴走族の子供達に対して暴走族から抜け出すことの必要性と、暴走族から抜け出して社会へ戻るために警察や社会が本気になり協力するとの主旨のメッセージ「今暴走族に入っている君たちへ」を私自身で書いて彼らに伝えるとともに、一方では徹底した取り締りを行った。また、役所や、地域の人たちにも呼びかけ、300~400 人と一緒に暴走族を包囲し話をした。

その過程では、厳しい検挙を行い、条例も作った。解決にあたっては解決に向けての社会の本気を彼らに伝えることがポイントだったと思っている。徹底した取り締りと立ち直り支援について彼らにどうやって伝えるかを、いろいろな側面から工夫した。子供達は就職し、立ち直り、今、広島では暴走族そのものもほとんど影も見られない。広島社会全体で取り組んだ成果として治安状況を大きく改善したのだと思う。

社会には解決が難しい社会問題がいくつもあるが、その問題の一つ一つをしっかりと解決することで、世の中は少しずつ状況が変わってくると思う。この暴走族の問題を契機に県民に対して、警察と県民が一緒になって広島の犯罪を 3 年間で 3 割減らすことを提起した。3 年経って 35%減った。

それは、今まで解決ができなかった暴走族問題を解決したことで広島県警も自信を持ち、問題解決については警察だけでなく大きな社会の力を集めることが必要であることを理解した上での取り組みができたからであると思う。

3. 東京の子供をとりまく様々な問題

東京へ来てから、いくつもの子供の問題には社会の力を集める事で解決していこうと思ったが、本当にびっくりするような状況にあることを知った。当時は、コンビニになどでは成人図書とそれ以外の図書が棚に混在し、放置されていた。また、渋谷には子供のつけた下着の売買を公然とする店があった。店の従業員は、「何も悪いことはしてない。ニーズがあるからやっている。悪いなら警察呼んでこい。」と言っていた。その状態を見て子供達が「だいたい、この程度だ。大人は。」と思ってもおかしくない。

今、性の低年齢化はひどい状況である。性の低年齢化の問題を背景とした援交や少女買春が問題になりはじめたのはつい最近、平成8年頃からである。東京都内の中高生を対象とした性意識に関する調査において、12年前の1990年、高校3年生の17%が「性の体験をしている」と回答していたが2002年では同じ高校3年生で45.6%と激増している。しかし、日本の大人社会は女子の性の低年齢化に対して何も言ってきてはいない。文科省の指導要領の中で、性教育についてはエイズの問題や人格を尊重等の大切な事を教えているが、「中学生は性交渉をしてはいけない。」とは書いてはいない。彼女達の読む少女雑誌は化粧とファッションの記事中心だが、その中には性の体験をせかすような情報がおもしろおかしく書いてあり、その種の雑誌は山ほど出版されている状況で子供達が育っているが、大人社会は何も言っていない。何とかしなければいけないではないか。

痴漢の問題も同じである。警視庁は年間2,200人ぐらい検挙している。被害者の半分は未成年、4割は中高校生である。大人が子供達に痴漢をしている。2,200件は検挙数だけで実態はわからない。ある高校に行き、「大人社会に言いたい事」を聞いたところ、女子生徒から「私はこの間、電車の中で痴漢されました。この高校にもたくさん痴漢の被害者がいます。制服を着ている女の子はおとなしいと大人は思っているのですか？」と聞かれた。その場にいた生徒の200人中40人は痴漢の被害や、見た経験があった。これが子供を大切にしている社会と言えるのか。その時、「痴漢を絶対に許さない。」とあの高校生に自分なりに約束した。「なんかするから待っていてくれ」と。

他にも、児童虐待や家庭崩壊の問題もあるが、驚かされたのはフリーターやニートにつながる学校の問題である。

このように信じられないようなだらしない状況はこの高校だけではない。

ある高校に「セーフティ教育」として、犯罪にかかわる話をしに行ったが、警視庁の係官による事前説明の間、高校生の私語で何も聞こえず、注意してもほとんど効き目がない状態であった。その後の私の話しは真剣に聞いていたのは3分の1程度で、残りの3分の2は、私語をしていた。今の子供達は私語をしている状況が当たり前であるため、先生達も怒ろうとしても怒りようがない。また、ある普通高校では、ガムの食べカスが無数に廊下にくっついてきたこともあった。先生たちは完全に敗北し、注意して直せるとは到底思っていない。子供達はその状態が当たり前だと思っている。そのように社会を甘く見ている子供達は、社会に出ても正社員として仕事をする事など耐えられないと思う。これはひとにぎりの高校だけではなく、都立高校200校のうち、同じような高校が20校はあるということだ。こういう子供達に私たちは育てて、社会人になっている。無視できない大きな問題ではないだろうか。

少し下火になっているが、不登校の生徒の比率が東京都内の中学校で3.2%、1クラス学級に、1人か2人はいる計算になる。昔は、不登校の子を皆で学校へ行こうと誘ったりしたが、今は違う。不登校を権利として認めようとする動きもある。学校や友達の問題があり、それが解決しないために行けない子供には援助しなければいけないが、「学校に行かなくてもいい」という状態が見過ぎされ、蔓延しているのはどうかしている。「学校に行く事は社会人になるためであり、学校に行く事はいろんな人たちの中で生きていく事を学ぶことである。だから行く事が必要である。」という大人のメッセージが、不登校の子供達にも、周りの子供達にも伝わっていない。

4. 私自身が取り組んできた事

いろいろな問題はあるが、このうちのいくつかは、解決に向けて私自身もチャレンジしてきた。たとえば氾濫する有害図書の問題や子供の下着売買の問題は東京都の青少年健全育成条例を改正し、有害図書の規制も強化した。私は「表現の自由」を侵害する悪玉と称されて、「東京都青少年健全育成条例改悪反対同盟」に罵られたりしたが、子供に有害図書を見せていい訳がない。疑わしき本は、真ん中にナイロンテープを貼って開けられない様にして売ることとした。今、コンビニなどでは簡単には成人図書を手に取れる状況はなくなっている。渋谷の下着売買の店もなくなった。

また、かつて東京に2,000機程度あった有害自動販売機は、年齢識別装置の設置義務を課したところ、この機械をつけるためには投資しなければいけないため台数が半減した。そんな形で、有害図書の問題も取り組むを経て大きく状況が変わってきた。

雑誌の問題で言えば、日本では国際線の客室にはのせない種類の雑誌を子供達が手にとれる駅の売店で売っていたり、スポーツ新聞も自宅に配達されるものにはあまりえげつない記事はないが駅売には掲載されていたりする。プライベートな空間では規制されているにもかかわらず、女性も子供もいる公共の空間で見たい放題なのは反対ではないか。

「中学生の性行為を禁止する条例」を東京都が作って騒ぎになった。その際、条例が石原知事の考えであるかのように報道されたが知事自身は「お前はそういうけど、そう簡単にはいかない。」と考えていた。最終的には知事も放置できない実態を認識され、条例を改正することができた。

東京都の条例は「青少年の性行為は、慎重でなくてはならない、そのことを大人は子供達に伝えなければいけない。」ということ書いた条例である。「とりわけ心身の変化が著しい人格形成の途上である者に対しては特に慎重に対処しなければならない」と書いてある。今回なぜそう書いたかという理由が二つある。一つは、「性行為をするな。」と教えることができない先生達のために、条例をそのまま読む事により言えるようにするため盛り込んだ。

もう一つは、子供達に条例に込めた思いを伝えることである。条例を改正した際に、私の名前で東京都内の中学生にメッセージを書いた。このメッセージは、「皆さんに性という大事な問題をいい加減な安易過ぎるやり方で、長い人生のスタートをきってほしくないのです。まして大きな傷を負ったり負担を背負ったりしてほしくない願っています。」という内容である。

また、条例に反する情報を流すことへの自粛努力義務も作った。表現の自由に関わるため、すぐに強制することはできないが、社会としての全体の考えを出版する側の方にも伝えていくことも、目的としていた。

今、JRには女性専用車両がある。浩志会で長くお付き合いした方がJR東日本の幹部におなりになり、その方にも相談して努力してもらった結果、埼京線から女性専用車両を設けていただいた。その後、中央線にも広がり、私鉄各社が追随してくれた。痴漢の問題がそれですべて解決するわけではないが、苦しんでいる子供達に「ここへ乗ればまず安心だ」という場所を作ってやるのが、大人の責任であると思い、皆さんを説得して受けてもらった。

フリーターやニートの対策としては、今、東京都では文科省の支援のもと、5日間連続の職場体験制度をはじめている。この制度は平成10年におきた「サカキバラ事件（神戸須磨児童連続殺傷事件）」に大変なショックを受けた、兵庫県の教育委員会や先生等が何かしようとして「トライやるウィーク」として5日間連続で地域の人たちと一緒に子供たちを育てる事を始めた。この「トライやるウィーク」を境にして、多くの不登校の子供達が学校に戻ってきた。子供たちは、学校に行くということは、世の中に出て働くために必要なことを学ぶ事だということ学んだ。その後、富山県にも広がったが、その後はほとんど広がらなかった。東京都内でも1日か2日でお茶を濁していたものを本格化し、東京都として「わくわく（work work）Week Tokyo」を立ち上げた。平成17年度は1万人の中学2年生が5日間の職場体験に参加している。職場体験のよさは受け入れ事業所を学校、PTA、地域の町内会などの人がみんなで協力して開拓することであり、その過程で「子供達を育てようという」、という雰囲気ができあがる。東京都は全ての中学校に広げる準備をしており、また、小学生向けに自然体験をしっかりやらせようという、取り組みも始めている。そういう取り組みを通じて子供達に大人の真剣な思いを伝えていくことは大変大事だと実感して

いる。

また、子供達を育てる中心は学校であると私は思っている。いろんなボランティア活動もあるが、ボランティアは有志の子供達しか参加しない。私たちは、すべての子供達に大人のメッセージを伝えなければいけないため、いろんな取り組みは学校でこそ行わなければならない。そのため、私たちは学校や先生達を非難するだけでなく、学校を盛り立てて子供達に大人のメッセージを伝えてもらうための工夫をしていくことがどうしても必要だと思う。

そういう思いもあり、私は「おやじ日本」の活動をしている。日本各地にある「おやじの会」は学校を先生たちや、PTAのお母さんたちにもまかしておけない、自分たちができるだけの範囲で、学校や先生たちと話をし、子供達と直接接しようよ、というお父さんたちの活動である。私はそうしたオヤジの力を学校に結集し、もっともっと子供達に、大人全体として「君達を大切に思っている」という思いを伝えたい。全国の「おやじの会」を支援するため「おやじ日本」という団体を作った。活動については星野仙一さんにも協力をお願いしているが、私自身もその会長として「おやじの会」を全国にも広げ、活性化していこうという動きもしている。そういう動きも子供達のためには大切だと思う。

5. 最後に

最後に大人の本気をどう子供に伝えるのか、ということ、それぞれの立場で懸命に考え、具体的な行動することが大切だと、いうことを実感しているということ、を述べて終わりにしたい。

以上